

目的 生体の腰部における左右差は何らかの形として高い比率をもって表出している。この被験者そのものの持つ左右差が、姿勢の変化やファンデーションの整容効果等を検討する場合、基本的な要因として深く関与していると思われる。本研究は、左右差のある被験者を選定し、靴のヒールの高さによる姿勢の変化とファンデーション着用の有無の関係及びガードルのカッティングの差異と補正状態との関係を検討した。

方法 ヒールの高さによる姿勢の変化ではガードルなしと着用した状態で、裸足、ヒールの高さを3cm、5cm、7cmと変化させ、前面、右側面、後面の3方向より写真撮影を行なった。形状の変化では、0°、45°、90°、135°、180°の5方向よりモアレ撮影を行ない、それぞれ裸足を基準に比較検討した。次にヒールの高さを5cmに限定して、同一素材で作られたフレーン型と立体型の2種のガードルで、丈はショートとロングの2種、すなわち4種のかードルを着用し、後面よりモアレ撮影を行ない、整容効果と左右差についてガードルなしを基準に比較を試みた。更に、モアレ法の裏づけとして直接法のスライディングゲージによる断面採取を行なった。

結果 ①姿勢の変化は裸足に比べ、3cmでは全体に前方へ、5cmでは後方へ傾き、7cmでは上半身は後方へ下半身は前方へと変化し、おじれが認められた。ヒールの高さの変化しても腰部の形状への影響はみられない。②ガードルの形の違による整容効果では、ショートのフレーン型にヒップアップ効果が最も大きくみられた。③ガードルなしの状態では左右差の大きい部位ではガードル着用時にはより強く左右差が表出することが認められた。